

## 安積疏水の現状と歴史的価値 Asakasosui status quo and historical value

根本 和俊

Nemoto kazutoshi

### 1. 本報告の目的

幾多の困難を克服して完成した安積疏水は、福島県最大の湖「猪苗代湖」の水を灌漑用に供し、今年で 139 年を迎える。その間農業用水、水力発電、工業用水 或いは郡山市民の飲料水に至るまで様々な役割を果たしてきた。また、安積疏水は 2016 年に未来を拓いた「一本の水路」として日本遺産認定、同年に世界灌漑施設遺産の登録を受けており、歴史ある土木遺産として高く評価されてきた。本報告では安積疏水の現在の問題点、歴史的価値の活用方法について整理する。

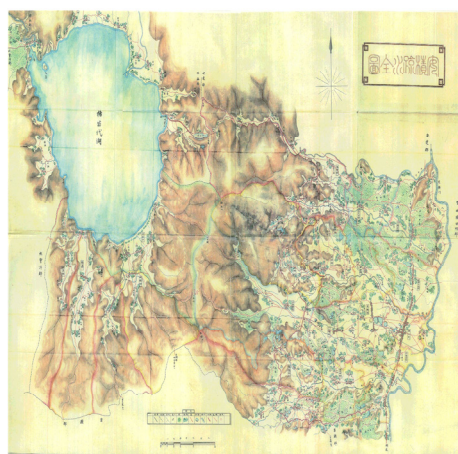


図 1 安積疏水全図 (asakasosui all map)

### 2. 現代農業の課題

安積疏水は、日本初の国営農業水利事業として明治 15 年より供されてきた。安積疏水が完成してから水田・人口はみるみる増加し、福島県中部の発展を支えてきた事は言うまでもないだろう。しかし近年、組合員の減少・高齢化、災害による水路への影響等多くの問題が発生している。ここではその中から組合員の高齢化問題について特筆することとする。農業の担い手、農家の減少が全国で深刻化していることは周知の事実である。我が国の人口が減少局面に

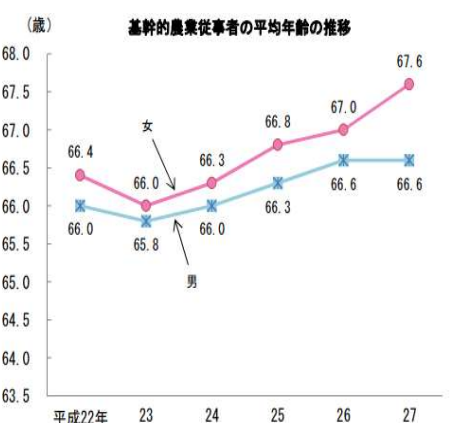


図 2 農業従事者の平均年齢 (average age)

農林水産省 HP より引用

入るなか、農村部から都市部への人口集中が進み、人口集中地区 (DIDs) の割合は令和 17 年 (2035 年)

には 7 割と推計されている。一方、非 DIDs では、人口が 8 割に減少するとともに、高齢者人口は 1.2 倍に増加し、高齢化率は 36% と推計される。それに伴い、主に農村部で行われる農業従事者の平均年齢は年々増加がみられる。(図 2) 米価の下落、若者の第 1 次産業離れなどの理由から更なる農業従事者の減少・高齢化が懸念される。本区として事業運営費の収入割合は、組合員からの組合費が大半を占めている為、結果として組合員・受益地の減少は収入減に繋がり、サービスの低下の恐れがある。今後これらの問題に対処する為には、国等の大きな単位での支援策を農業従事者に広く宣伝・広告し、活用していくことが重要である。

安積疏水土地改良区 asakasosui land improvement district

### 3. 歴史的価値と活用方法

安積疏水の施設には数多くの歴史的施設が存在する。特に十六橋水門は、開削当時から現存する歴史及び景観の重視がされた日本最古のコンクリート水門施設であり（図3）安積疏水のシンボリック的存在である。周辺にはファン・ドールン像、渡辺信任公德碑（初代理事長）、量水標等安積疏水事業に関わる像や碑などが数多くある。会津藩が採録した風土記によると、「…戸口川に架す十六断ありと云、…中流に塚の如くに石を累（かさ）ね築き、其間に丸太を並て橋とし、相伝て空海（弘法大師）の作と云…」



図3 十六橋水門 現在 (zyurokkyo watargate)

とあり、空海がここを訪れた時、橋がなく不便な思いをしていた人々の為に16の塚を築き丸太を渡した橋が十六橋の起源と言われている。その後明治12年安積疏水事業により道路橋兼用十六眼鏡石橋水門への改築を経て（図4）、現在は現役の重要な治水施設として役割を果たし続けている。また、平成13年～平成16年の改修については水門の持つ歴史的背景と周辺を取り巻く豊かな自然環境を損なわぬよう、水門を新設するのではなく、既存の水門を補修補強することで新築と同等以上の治水機能を持たせる工夫がされている。工法決定にあたっては学識経験者からなる「十六橋水門検討委員会」を設立し、平成13年に全国初の国土交通大臣の特別認可を受け着工している。他施設に関しても上述のように「一本の水路」として日本遺産に登録されるなど歴史的価値は高まり続けている。



図4 十六橋水門 明治期 (zyurokkyo watargate)

これらの価値の活用にあたっては、2016年日本遺産登録を機に、周辺地域の小学生や他団体に施設見学や研修等を年間約3000人に行い啓蒙活動を行っている。他に新聞社や映像会社からの施設映像の提供や撮影依頼もあり、地域への広報活動としても非常に役立っている。また、行政等を通し海外からの研修・見学にも逐次対応している。

### 4. まとめ

以上のように安積疏水は問題・課題に対し、地域や行政と密接に関わり合いながら適切な運営に努めている。開削から140年を間近に控える今、日々大きく変わっている社会情勢や課題に柔軟に対応する能力が重要になってくるだろう。また、我々にはこれら施設を管理・運営する者として、歴史的価値を後世まで広く伝えていく責務がある。今後も引き続き多様な方法で周知に努めたい。